
流星のロックマン 4

空海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4

【Nコード】

N0205Q

【作者名】

空海

【あらすじ】

小学六年生になった星河スバル。彼は3度も地球の危機を救ったロックマンである。人々はロックマンのおかげで平和な生活をおくることができた。しかし地球に新たな危機が迫ろうとしていた。果たして地球の危機を救うことが出来るだろうか。

新たな生活のスタート（前書き）

初めて書いたので下手くそです。でも頑張って書いたもので読んでくれたら光栄です。あと感想を頂けたらありがたいです。

新たな生活のスタート

?????

「あれは順調に進んでいるか？」

「はい。まだ時間はかかりそうですが。」

「まあいい。出来るだけ早く頼む。」

「はっ。」

220X年

かつてこの地球には3度の危機が…

しかしその3度の危機を救った少年がいた。

その少年の名は星河スバル。

彼は宇宙からの逃亡者であるウォーロックと合体し地球のヒーローであるロックマンに変身出来るのである。

コダマタウン

「さあ、今日から六年生。張り切っていくわよ...と思ったけど、
太はまた遅刻。いい加減にし...」

「委員長」。

「全くいつまで待たせるのよ。」

「そうですよ。新学年早々。」

「ごめんよ。委員長。キザマロ。」

「も、これからは注意しなさい。」

「大変だね、全く」

「オイオイ。スバル」

「なにさ。ウォーロック」

「早く行かねーと遅刻すんぞ。」

「いけない。早く行こう。」

コダマ小学校

ザワザワザワザワ…

「どうしたんだろう？こんなにザワついて」

「転校生が来るのよ。」

「へえ。」

（何か感じる。）

「どうしたの？ウォーロック。」

「なんか感じるんだよ。」

「何が？」

「FM星人。」

キンコンカンコン

「えーおはよう。今年もこのクラスの担任になった育田だ。えーあ

と転校生が3人いるんだ。入って来い。」

「オ、オイ。あれって…」

みんなはザワめき始めた。

「じゃあ自己紹介を。」

「皆さん。お久しぶりです。双葉ツカサです。よろしく」

「ジャックだ。よろしく」

「はじめまして。響ミソラです。よろしくね。」

「キヤー。ミソラちゃんだ。本物だぞ。スゲー」

「静かに。じゃあ席はどこがいいかな？」

「私スバル君の横がいいです。」

クラスの男子全員がスバルを睨んだ。

（…なんで？）

「二人は後ろの空いている席でいいか？」

「かまいませんよ」

「いい」

「スバル君。よろしくね。」

「う、うん」

「やっぱりか。」

「何が？ウォーロック」

「FM星人がいる」

「あら。お久しぶりね。ウォーロック」

「久しぶりじゃねーか」

「やはりか。ハープとコーヴァス…それにジェミニ。どうしてお前が」

「今やツカサのウィザードさ」

「そうだったのか」

「は、終わった。」

「はらへった。」

「さー帰ろう。」

「そうだ。ミソラちゃんはどうやって学校に来るの？」

「え、知らないの？」

「うん。」

「スバル君の家からだよ」

「…え？」

「知らなかったの？」

「え、ま、ま」

スバルの家

「ただいま」

「お帰りなさい。スバル。ミソラちゃん」

「お邪魔します…」

「ただいまでいいのよ。」

「は、はい…ただいま」

「お帰りなさい」

「ミソラちゃんはこの部屋つかうの？」

「ここだよ」

「ここって…ぼくの部屋？」

「うん。…だめ？」

「い、いいけど」

「スバル。ミソラちゃん。ご飯よ」

「はい」

リビング

「おいしいよ。お母さん。」

「おいしいです。スバル君のお母さん」

「お母さんでいいのよ」

「え、はい。お母さん」

「うん。じゃあ私もミソラってよんでいいかしら？」

「は、はい」

（ただいま）

「父さんだ」

「うん。いいにおいだ。お、ミソラちゃんだね」

「はい。あ、あの…これから…あの…よろしくお願いします」

「ああ。こちらこそ。よろしくね」

スバルの部屋

「おいしかった」

「おいしかったね」

「もうお風呂も入ったしそろそろ寝るけど布団持ってくるね」

「私スバル君と一緒に寝たい」

「…え？」

「だめ…かな」

（どうしよう。でも…よし）

「分かつたよ」

「やった」

「じゃあお休み」

「うん。お休み」

新たな生活のスタート（後書き）

感想をよろしくお願いします。

新たな敵

スバルの部屋

「スバル君。朝だよ。早く起きて。学校遅れちゃうよ。」

「いま何時？」

「8時だよ。」

「しまった。遅刻しちゃう。」

リビング

「おはよう。」

「おはよう。早くご飯食べなさい。学校遅れちゃうよ。」

「はい。」

玄関

「行ってきました。」

「はい。行ってらっしゃい。」

コダマ小学校

「ふゝ間に合った。」

「ギリギリだよ。スバル君。もっと早く起きなきゃ。」

「う、うん。ごめん。」

「いいよっ。」

「ふう、やっと終わった。」

「帰ろう。」

「????」

「あれが星河スバルか。」

「オイ。あれを使うぞ。」

「はっ。」

公園

「スバル。何か来る。」

「えっ。」

（ドカーン）

遠くの方で音がした。

「展望台だ。」

「急いで行こう。」

展望台

（来たな。）

「お前は誰だ。」

「我が名はヘブンス・ゴッド。俺は貴様を倒しにきた。」

「スバル。電波変換だ。」

「了解。」

「ほう。ロックマンのご登場。」

「これ以上お前の好きにはさせない。」

「ならこの俺を倒してみな。」

「行くよ。ウォーロック。」

「オウ。」

ロックマンとゴッドの闘いが始まった。

新たな敵（後書き）

感想よろしくお願いします。

V S ヘブンス・ゴッド

展望台

「行くよ。ウォーロック。」

「オウ。」

「ブレイクサーベル。」

「ゴッドバリア。」

ロックマンの攻撃は全く効かなかった。

「ザコめ。ゴッドブレード。」

ゴッドの攻撃はロックマンに命中した。

「ぐはっ。なんて…パ…ワー…だ…。」

ロックマンは電波変換を解かれた。

「これが地球を3度救った英雄の力か。まったくだ。話にならん…ん？なんだあれ？帰還命令か。トドメをさすつもりだったが。まったく命拾いしたな。ザコ。」

ゴッドは消えた。

病院

「…あれ？ここは？」

（サクサクサクサク）

「暁さん。」

「おっ。目が覚めたか。」

「はい…。どうして暁さんがここに？」

「ん。ああ。えっとコダマタウンに不審な電波を察知したからいつてみたらボロボロのスバルがいて病院まで運んだってわけよ。」

「そうですか。あの、ありがとうございました。」

「ああ気にすんな。それより変な敵と戦っただろ？」

「あ、はい。」

「やっぱり。」

「いったい何者なんですか？」

「分からない。おそらく…いや、なんも分からない。」

「そうですか。」

「ああ。くれぐれも気をつけてくれよ。」

「はい。」

「じゃあ俺は帰るな。また連絡するから」

「はい。ありがとうございました。」

「????」

「何かわかったか。」

「いや。ただのザコだ。」

「そうか。なら次は…。」

二週間後

「今日から学校だ。」

「ほんとに大丈夫？」

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう。ミソラちゃん。」

「うん。さ早く学校に行こ。」

教室

「さあ今日は1ヶ月後の修学旅行についてだ。」

「せんせー。今年はどこに行くのですか？」

「今から言うから。去年はシーサーアイランドだったが今年は…。」

「今年は…？」

「スノーアイランドだ。」

（オオ。 スキーとかすんのかな。 いやもう雪溶けてるだろ。 いやまだ溶けてないらしいですよ。 マジかよ。）

「静かに。 今から飛行機の席を決めるぞ。」

20分経過

「やった。 私スバル君の隣だ。」

「そうだね。 ミソラちゃん。」

「楽しみだね。」

「そうだね。」

1ヶ月経過

「スバル君やっとだね。」

「うん。」

今日から修学旅行である。

玄関

「スバル、ミソラ。楽しんできなさい。」

「うん。じゃ行ってきます。」

「はい。お母さん。行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

空港

「今から出発するぞ。」

「楽しみだね。」

「ウオゥ。いっぱい食うぞ。」

「ゴン太…食べ物ばっか…。」

こうして楽しい修学旅行が始まった。

?????

「スノー・ポセイドン。行ってこい。」

「はっ。」

V S ヘプンズ・ゴッド（後書き）

なんか敵の名前めっちゃ変だ…
感想よろしくお願いします。

修学旅行 その1

スノーアイランド

(ひえゝ、やっぱ寒い。)

「さ、寒い。ヤエバリゾートとは大違いだ。」

「そりゃ寒いですよ。だって現在の気温は1度ですから。」

「い、1度ゝ。」

「はいはい。静かに。今からバスに乗るぞ。」

「はゝい。」

ホテル

「うわゝ。きれいなホテルだな。」

「ほんとだね。スバル君。」

「えゝ自分の部屋番号の鍵を持つてる人のところに行つてくれ。」

（スバルゝ。こつち）

スバルの部屋はゴン太、キザマロ、ツカサ、ジャックの5人部屋である。

「早くいこーぜ。」

「ここか。603」

603号室

「うおゝ。広いぜ。」

「すごいね。景色がきれいだ。」

「どうした。キザマロ。」

「ジャ、ジャ、ジャック君。いえ…なんでもありません。」

（…高いのが怖いのか。）

「あつ。6時だ。」

「メシー。メシだ。」

（…ゴン太）

ホテルロビー

「今からご飯の時間だが…バイキングだから好きなだけ食べていいぞ。」

（はっい。）

「じゃ…食べよっか…。」

スバル達のテーブルには山のようなご飯が…

「うんめ〜。」

「…ゴン太（君）」

「ごちそうさまでした。」

「え〜みんな聞いてくれ。明日はスキーをする。」

（うお〜。やった〜。スキーだぜ。）

「今日は明日に備えてしっかり休め。」

（はい。）

「よし。それじゃあ解散。」

「楽しみだね。ツカサ君。」

「うん…。」

「どうしたの?」

「スバル君にお願いがあるんだ。」

「何?」

「こんなときになんだけど…僕とブラザーを結んでくれないかな…。」

「いいよ。」

「あ、ありがとう。」

「どういたしまして。じゃもう寝よっか。」

「そうだね。お休み。」

「お休み。」

修学旅行1日目が終わった。

修学旅行 その1（後書き）

感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0205q/>

流星のロックマン 4

2011年1月13日01時16分発行